

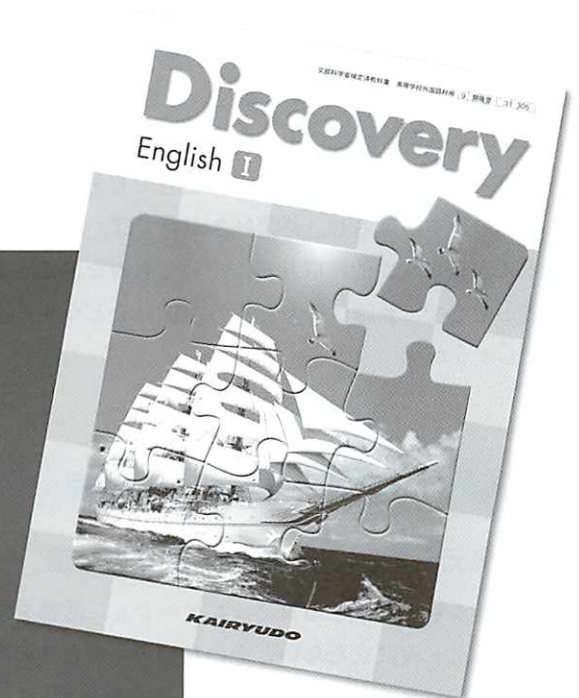
Discovery Englishの世界

2012 No. 2

◎緑茶に砂糖を入れるんですか？ Unbelievable!

でもよくよく考えてみると、緑茶も紅茶も、もともとは同じだから、砂糖や蜂蜜を入れてもおかしくはない？

→ Lesson 2 Japanese Foods in the World



開隆堂

英語好きを育てたい!



鹿児島純心女子短期大学教授 有馬 義秀

はじめに

新しい学習指導要領による授業が、高校では来年度から始まります。先生方にとって、授業改善の試行錯誤も佳境に入っているところでしょうか。英語で授業をとく、CAN-DO リストの作成など、これまで以上の要求にどう答えるか。筆者は、過去 20 年間にわたり高校生に英語の授業を行い、また、その後高校の先生方の授業を数多く見せてもらいました。そこで、これからの英語授業の改善に向け、強調したい幾つかの点に限って私見を述べてみたいと思います。そのことがコミュニケーション英語 I の教科書 *Discovery English I* 作成の際の参考意見として反映された点でもあるからです。要は基礎・基本が定着し、英語好きが育てば、外国語学習は生徒本人が自ら意欲的に取り組んでいくものなのですね。学習者が中心で、教師はそのための手伝いをどうするかではないでしょうか。

英語好きが育つ授業改善の視点

1 単元主義と4技能統合型授業の創造

生徒が魅力を感じるコミュニケーション活動をするためには、単元主義に立たないとそのための「ゆとりの時間」を生み出すのは簡単ではない。1 レッスン全体でいつも考える。6 時間配当でどのような要素を入れていくか。いつも決まりきった、読んで訳して訳して読んで、はい最後は補充問題。あと単語を覚えてこいというような、退屈な配当計画では生徒達の意欲が湧くはずがありません。いかに task の設定を考えるか。単元の一番最後にどんな large task を持ってくるか。例えば、「dramatization の task を 1 レッソンの最後にやろう。」と生徒に言うと、それだけで彼らなりのゴールがはっきりと見えてくる。「このレッスンを読んだら、まとめにディベートをやるぞ。」ということで、彼らはそのゴールに向けて今日、レッスン 5 の 3 ページ目を読んでるんだ、といった意味などが実感されてくるんですね。そういう big task とか毎時間の small task を頭に入れて単元全体で勝負することが必要ではないでしょうか。

また、常に文法を扱ったら「ターゲット・センテンス+1」

の言語活動をすぐセットする。例えば“I stayed up late last night.” というのが出てきたとします。「さあ、これに+1 してみよう。ペアで考えてみよう。」ある生徒は、“I stayed up late last night. I wanted to watch my favorite TV program.” などと情景を思い浮かべながら作っていく。ここに授業の個性化が生まれる。生徒同士で発想を交換し合う。このようにして人間の血の通った文法授業が生まれてくる気がします。

本物志向のコミュニケーション学習にもっていくためには、やはり usage 中心から use を重視した授業へ改造する必要があります。そして、教科書を使いながらも、次の3つを意識した授業を創る。つまり、creative messages, impromptu, そして、interaction の要素が含まれた communicative task を開発すること。まずは、いかに自分の英語の授業に「人間としての創造的なメッセージ」が入った授業をするかという問題意識を常に持ちながら、task を 1 時間または単元のなかに設定していくことです。和訳先渡しが一世を風靡しましたが、それもこのような communicative task の時間をどう生み出していくのかという問題意識から生まれたものでした。

次に、impromptu ですが、これはなかなか難しいことです。いかに即興的な場面で言語使用できるか。そのための練習の場をどう設けるか。しかし大抵は、オール・コミュニケーションの授業でもそうですけども、「お互いにダイアログを作りなさい。」と教師が言って、一生懸命生徒達はノートに書いた後、それじゃプレゼンテーションを、となる。そして、それはノートに書いたものをただ読んでいるだけ。それじゃリーディングじゃないですか。これは impromptu じゃない。しかし、ある中学校の授業ではこのような場面を設定していました。教師が授業の最終場面で、“Opinion time!” と言うと、中学生がお互いに意見を言い合うんですよ。その意見なんかまさに impromptu で、お互いに質問をして即座に答え合っている。毎授業時間の 10 分間帯学習をやった、この interaction 活動が続けている結果、間違いを恐れず挑戦するようになったそうです。ノートに言うべき英語を書いてそれを読み合うだけの活動とは違う。口頭音声による即興性を仕込みつつ、常に授業の中に interactive な、双方向的な言語活動がなされていた。だからペアやグループ活動がしょっちゅう設定される。この impromptu で interactive な発表の場をどう作っていくかということがこれからさらに

求められていくと思います。原則英語でという発想は、生徒自身が授業中どれだけ生きた英語を発し、また、先生、友人の英語を理解して何かの活動にどれだけ熱中できたかということではないでしょうか。

2 身近な話題が提供され、自分の考え等を発信できる授業

基礎・基本が定着するためには、学習材の学習者に与えるインパクトが大きい、intensity の強い授業が必要です。そのためには身近な話題が提供され、自分の考え等を発信できる、そんな授業が求められます。いかにテーマを personalize させるか。この内容は自分の生活、生き方に関係がある、と生徒たちが思ったら最後、彼らの学習力や意欲はぐんと高まります。現実には、生徒の多くが「この題材は私とは関係ないよ。先生勝手にやってくれ」と言いたくなるような授業になってしまっている。「教材は生徒の心の中にある。」私はこれに尽きる気がしています。Caring and Sharing in the Foreign Language Class という humanistic approach を紹介した本の中の一節に、“Our major failures do not arise from lack of information. They come from our inability to help students discover the personal meaning of the information we so extravagantly provide them....” (下線は筆者)つまり、豊富に与えるいろんな情報の中で、生徒達が「自分にとっての価値」を見出したときに、初めて彼らは主体的な学び手になるんだと。だから、“Combining the subject matter to be learned with the feelings, emotions, experiences, lives of the learners....” という個人の世界、生徒一人ひとりの持つ個人的な体験なり感情なり情緒なり、そういったものと subject matter (主題)をいかに結びつけていくか、ということが非常に重要なことになっていくんじゃないかと思います。学ぶ前には生徒の先行体験等のスキーマを活性化させるプレ活動をやり、学びの途中や学んだ後には、個人としての考えや意見などを日英両語で交換し合う授業の中で、彼らのモチベーションは上がっていき、「コミュニケーションとは他の人々と共有することなり」という学習活動の喜びを実感できるものと考えます。

3 教材の「談話分析」に基づく立体的な授業設計

今まで英語 I, II の授業を見せてもらって、「なんでこんなに平板な授業をされるのかな」ということが少なくないのが実情です。一番の原因には、教材研究の段階で、談話分析が足りていない。教材のある passage の2ページ分がどういう談話構成になっているのか、というところを先生自身がマクロ的に把握できていないものだから、授業が極めて退屈で、立体的でないものになってしまっている。だから教える教材

の談話構成を教師がしっかり頭に置いた上で自分なりに再構成して、「1時間の授業の中で、全体の読解を最低3回はやりましょう。」と助言してきました。1回目はまず概要把握。skimming のレベルです。その次は Q&A しながら scanning のレベル。T&F でもいいでしょう。そして最後に intensive reading。これは一番のポイントのところだけをいくつか扱う。教材の全体と個との関係をマクロ的、ミクロ的に発問していく。最低これだけを毎時間やれば生徒は常に reading material を立体的に見る目っていうのが育ってくるのです。自然と談話分析を行う力が生徒にも育つというわけです。的確にサマリーを行う力はこんな授業から育つと思います。これは受験でのスピーディーな読解にも絶対に役立ちますよ。

そして、教科書に書いてあることは全部分からせたいという先生の意識が邪魔してますね。生徒も生徒でそういう先生に習っている人は英文の全てが分からないと分かった気にならないんですね。中毒になってしまっている。英語学習で大事なのは tolerance of ambiguity (曖昧さに耐える) 心を育てることなのです。英語を理解するとは guessing game である、「全部分からなくも、ちゃんと分かる」ということを学んでほしい。そうでない生徒は、英語のスキルが習得できないから、未読の長文問題に挑戦したり、「センター試験の長文問題を5分で解きなさい。」って言われたら、“Oh, no!” っていうことになるわけですね。何を教えて、何を教えないか、英語学習のミニマム・エッセンシャルズをしっかり押さえた教師であってほしいものです。そのためには到達させたい英語のスキルを一覧にした CAN-DO リストが各校の英語科で作られ、皆で共有することで、達成すべき目標がより鮮明になることが重要です。そして、読解の科学、パラグラフ・ライティングの迫り方など新しい知見を生徒と共にさらに探究して行ってほしいものです。

また、教育には連続的形成と非連続的形成があります。中でも非連続的形成を狙った授業を考えてほしいのです。いつもはできないとしても、この非連続的形成、このことが最初に述べた言語学習の intensity にも通じる。先生方が与える情報の強度、つまり生徒の心に響く印象の強さが、intake の成否を分けるのです。wonder に満ちた世界とかね。「あの先生の授業は、時々おもしろいことをやってくれるよ。」という、生徒にとって心が揺さぶられるような、そういう瞬間があったときに intensity が強く働く。そうやって学んだ英語の知識というのは、ずっと記憶に残っていくんだそうです。「いや、英語は暗記教科だ。繰り返し繰り返しが大事よ」と主張なさる先生も多い。否定はしません。でも、frequency よりも intensity の方がずっと人間の記憶に残るそうです。生徒に英語の心象が残る、強い intensity がいかに英語の授業の中で必要か。追っかけてみたいものです。そのことも英語好きを育てる一つの方策かもしれません。

Discovery English I クイズ

① e-mail でしばしば使われる次の省略はどういう意味でしょう？

ASAP CUL8R

② 北極と南極では平均してどちらのほうが寒いでしょう？

北極 南極

③ 漫画家の水木しげるさんは子どものころ、どんな子どもだったと思いますか。

神童と呼ばれた秀才 いつも朝寝坊ばかりしていた 朝、学校に一番乗りだった

④ 試験前の勉強は次のどれが一番効率的だと思いますか。

徹夜でがんばる 勉強後気分転換をしてから寝る 勉強後すぐ寝る

⑤ 自分で打てる、糖尿病患者用の細い注射針は直径何ミリくらいでしょう？

0.2 ミリ 0.4 ミリ 0.6 ミリ

答えは次の Lesson をご覧ください。

① Lesson 1-2 ② Lesson 6-2 ③ Lesson 7-1 ④ Lesson 8-3 ⑤ Lesson 9-1

高等学校英語指導資料『Discovery English の世界』

平成 24 年 5 月 25 日発行

発行 開隆堂出版株式会社 113-8608 東京都文京区向丘 1-13-1 電話 (03)5684-6115

印刷 株式会社興陽社 113-0024 東京都文京区西片 1-17-8